

南
西
記

三

ル 7
3062
2



玉城

西と南に山
北城下町也

東は海に接する大河あり川西山村にあり
良百里西山固有仙し舟路三日之去船時より里
づ約一日二十里を日下迄の程西山山村とい別之

地方十二所石室甚仕掛あり東は海に接する大河也城中
地は次ぎよき一河は五重塔を元二十丈斗也一清朝の玉より

五重塔城内城 甚是事なり 城中の石室遊々 土地本邦よ
外は不詳者 奥文よりあり

坤ふありましく暖ふあり 四季もに草ああり歩入あり
年中瓜茄子西迄梅竹子密柑橙あり日月長短あり

遠くはとらへど本國の曆と潤月たごと同じ事あり

大清廣東州と安南必し入路入十日も安南國ありつてありある玉を是と廣
東とては潤月本必し二三月のあり九月十月日毎一屋夜て我必の

七十里むりの程ありる氣候はちよに 于時景興五十五年十二月廿日
遠い至日月の周り潤月たごと同じ事あり 安南國年号也

西山ふ村より川ありそ良の川には良夫より一町むり

一町むり門を新く城見附の家造り色草一町むり

のこも屋根を路なよ又カチヤンといふのよそあり

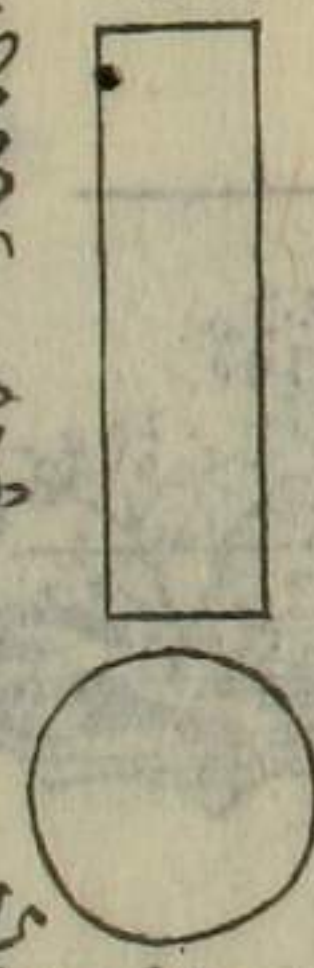
綱土を商人店支側より續けり我必よ少むあり

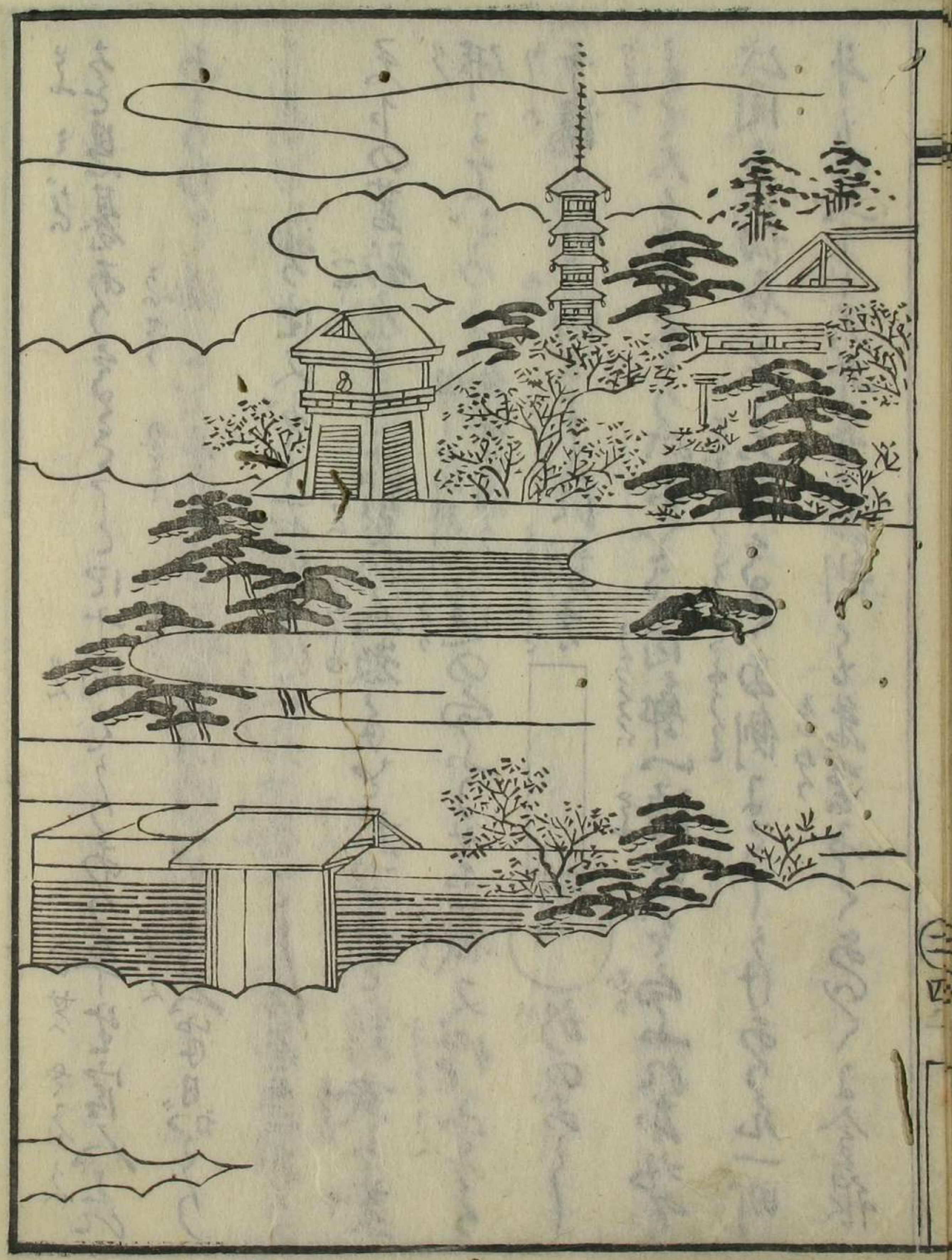
城下の二里に方程も在道筋云國騎三人
中官十人下官十人雜法者能人忠者六十人奴合百人

たうり十六人の者のこゝろを好むはして行るるよふ物より元
世所平のる見物人ののでりく別くはては八揮あり群集
せりそせより王城の外郭より六町平よりあはる者も別
け所と孫君のほは其まごころのよ揮深しう一回に
間斗奥の七八間あり二階もあり裏も廣くけし商人町
庭縁成所あり官人亮より料理方とせりて給あま
あまごめまがけ所まで十六人も少く安んじし其
表の公儀もさしや皆く前後もまごころをとおせりり
その日より下官二人おき一人は添あり其廿一日は官人ま

ら進退て國王四月見之被さるるより保角より中
亦を極くする月五費文白米武徳國王より下さるる
類又何れも下官一人はるを急用をさづく挨拶し
しゆしきりり けりしはもと通しありけりしは文字もまごころを
えりしは文字もまごころを 舟頭信がとんとめ又六人
者いふ玉えより舟中おのりあり 舟頭信がとんとめ又六人
者いふ玉えより舟中おのりあり 西の山一原をまより物をもとれすまごころは種満の
やうそよそ日く食物も不効ようやとたいせつおん一はよ
つて下官人とおれと官人朝のしん服甚だせりて書
けりしは一ありしは國王よりめりしは月見之儀也

つけらる中りありまゝと病人二人を宿よしとて十に
 人の学藝もて を智る能ハ下の方川紙一の基のてく世合せしものあり
くーとくハあのちちおせあり四方に柱と立下よふしと
 ちの中ぐいん足りまを基ののりま やえん 官人同及ふし つて
 初よがしきす乃筋を側けくの見物器集りて えんちうえんども 押と
 けけしき程あり王城の老門の扉よまりかごとり
 是より官人よつと内曲輪まを右左とも家中庭敷
 敷きまよして一町下門の上よみ三ヶ月たりの額よ修る
 ものあり カハイモツト云けふ
よそ指式しうらうら けおとくくくと三町斗もまらり
 いまでん老門より地行るまきり一町斗之内郭の入りふ

ちを見基ありまゝとこには十間たうりあり平生官人よ
 あがりわて海ととるまらる要害の備えを官人守日がうり
 こまことおち中又か右の方の三町に面たうりの屋敷あり
 右下の基敷をよそ大勢の人敷とて掃一茶と刻或は茶
 研りておろし 但し茶研ハ
我屋の通り 庭の向ふは茶藏又作山
 千場もあり なみ け別方  けのお
 きてたまごまかりけおとる内郭へ通まざるふに本丸有
 け間下の切石よそ右井まきくお側まきりけあり九一町
 斗も有べし天井并にお側も茶藏ありあつくは金銀



とらふたため結構ありし目と驚かせりしうけのこす
ほりものあり極彩色の傍におも金銀と入るに高様のおぢ
持せあり是も國よりお供する諸侯方の膝うけの中を安
ふらる位高貴なる方所に入るまでお供し候しけ
急對又酒飯と調ふもさうけなり禮義心とて挨拶
ふらふはこれに立寄るとお方側より御とさるて三度之
ちと下げしうがめらるるおどりの一切を又け即下れお十
間半を次牙こよ地りたりし奉丸の一面つと付くお互向
三間じりこゝまよ官人十口人とおつとせ聖ありて別小

一段高き一面に金銀瑪瑙をちりさためし糸とてその様
つきの強うけ國王おのふ左の王子方あるしうけふ
まこと終ふ國王御年位十歳じりお衣おのふおまの紗綾
おまを緞子のゴンとて一帯とておしお紐の小童後お持
おのりまことおまを織物のお人斗とてお幣とておつと結お
て頸と包裝のまげは金のうしとておしおたのみお王子とて
お衣おのりかしうに根のうしとておしお左の官人のおしお
おくおとつとて青黄赤白の絹とかしうよ巻おお水牛
一角のうしとておしおおと相造おお星お衣おの國王

詞解

モウハイハアホシ
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 一貫

御燈明 油 紙 扇子 鉢卷

股引 一重帯 米 喜世苗

田葉粉 枕 筆 墨 硯

水 湯 給物 船 手拭 庖丁

髮 櫛 差 車 兩親 男親 女親 兄

姉 女房 子 頭 眼 口

齒 眉毛 耳 鼻 舌 茶碗

飯 弓 火 鍋 釜 鉾

笠 のんごう 灰吹 えんごう 火入 めいごう 舟頭 ふねづか 敗布 たいふ いや

せろかん 物 もの 鷲 じゆ 藥 やく 猫 ねこ

馬 うま 綿切 わたぎり 明日 あした 雨 あめ 蚊帳 かや 灯提 あかり

鳩 うず 鳥 とり 鶏 けい 傘 かさ 大豆 あま豆 小豆 こ豆

男 おとこ 女 めい 茶 ちや 藥梳 やくし 日月 にちげつ 三日月 みかづき

物と調る変 ものしらべ 日下 かあ 下 げ 下 げ 下 げ 下 げ

右各南國詞あまり教多そた少しむかすくに就きあり
始けゆ一より一時水至の月五代い少し文おもあるもの
左日くらぐのふとて一詞をたづね書るゝあよ二初より
とふせしものみ代本風の飛一ものよとれ果れと云云牛もたは

るさいとちいよしんは孝又旅宿を所の若き男は
能定へさうとつくる信びしもあう又家くに灯燈ハ
ナリかけあんどざりあり舞のあざり椰子の汁をさし
頭つづけるもあけふぬるもさく椰子の汁と用し別をり
利刀柳をいれ大槻目し事し男女とも酒家の言と業家
まこと多く食する也歯か紅とつけしごとくましく
始げ地つありし時の餐の核子着熱のまをてまを男女と
と目しふしそ
酒家の言と金麻うしと
しあまし包し金麻うしと見つけかき後より
よくとらありし男の足の跟のまを人ばのよありこそと

あざいよりういけ地金務糸穀酒はなるふかうきと日用を
所の礎石といふ一切ふし中分はと官人流あくも濃
戸物まをの茶碗四時つけをて書を抄きし中より以下
い定のこびとさうそをまをる手紙たしと去りたよ書持とさす
のまを人けよまをし書ぬものいづくあくも小思のあき
すし出家斗あり初て二日と三日たち十二月廿日新国まよ
し法使下さき塚一足地身一足世し小鶏二羽茄子丸ま書
右六品是れ大世日の祀儀よ送いけ地送留申別後よ小
遣務十費文十五費文つぬ官所より渡さきは山小は

うひ又日教おまひてよろの典官兼よ下官も改りし
ひあつくさうんぐよらうし通辞を公易とんしそ公方
も呼又まねは後よ同日し喜物ちと求めよま
りき海ぐのたれしとがし内日下一外國より漂着者のり
玉王一目是の義也と尋らむ所を義の不成とす
外國をても漂流人來りし其國王一目是の叶りたすと
も其えは日下の人から故よ目是(如來)より彼より
是より舟ちゆく吉吉の事とありひ出し一日と書きし
三秋のあしとふし時のあるをお侍の内以まの京與五

十六年正月よと季号の智れを其年の年と父如書き
らわりの事どもなまてと日とくししと結るふ其類何
かしと始を介人の諸事の中より病をよてけ節の食事も
よまはた進み積る多く小便を多しと其國王より其附
い典業もいらく死刑は肝膽を碎こまをそとといひもそ
の切方く日く容体あしくお成業も咽と通るは
す後背中道を極んぐる身之容体は附は認めおと
まをよせつかけ抱ふ胸を痛め何年一度本後發をせおそ
ひ目も度本邦の地へ帆ちよびけよの收びふくと其の十

本堂一及び方丈輪藏有一切經 辰巳隅一信室在一後
て寮あり本堂の後に座禪堂あり佛殿の西面に本尊觀
音金佛と丸石脇士あり佛殿の北に國王代の位牌
あり又南の方に南寺用山の繪像とうけ別間に如
意輪觀音の内厨子あり法雨和尚の寫一觀音の寫奥
相六人の深流人お坐らるる時日も同じくらの辰巳の時に王
城官人一層け永長寺の葬禮をせし一及ち別間のも同じ
街道あり官人より佛法の通達葬禮儀式といふまてあ
官人も上下二に十人宛も出役被させ給ふ一十人のりのり

いづれも供をおなせしるる永長寺の大方所講あり
葬禮通しせらるる老若男女家々といふまて棺と葬禮
後といふがし我が線香燒香菓子類と持た右の宗
と我が一送りしとちたらしく葬禮ありしといふまて
後より永長寺の門内へ入り葬衣の借み六人衆因りて本
堂へかきとせ法雨和尚を座におして同音小の經を讀ます
了良時つつり中の經濟を本奠よりて念仏のりを後方丈
後の方乃鼻新一男之人とそかがけ棺と其所葬禮
但し棺の檜栗などを原にて埋めし身も木に埋められし内外
了良時はけつりは方丈と葬禮一葬禮納め二三人とそかがけゆくあり

おちんの戒名永長寺...
 一も徳あり...

如意輪觀世音菩薩

小兒とらごとく...
 但し水のとほ蓮の葉乃とよ...

幅を八寸...
 一枚紙表裏あり

不吉不來
 不吉不來

非是非來
 非是非來

甲寅李仲
 仲月吉日
 沐筆

永長寺住持法雨普供流通



如幻行人道隆敬刻

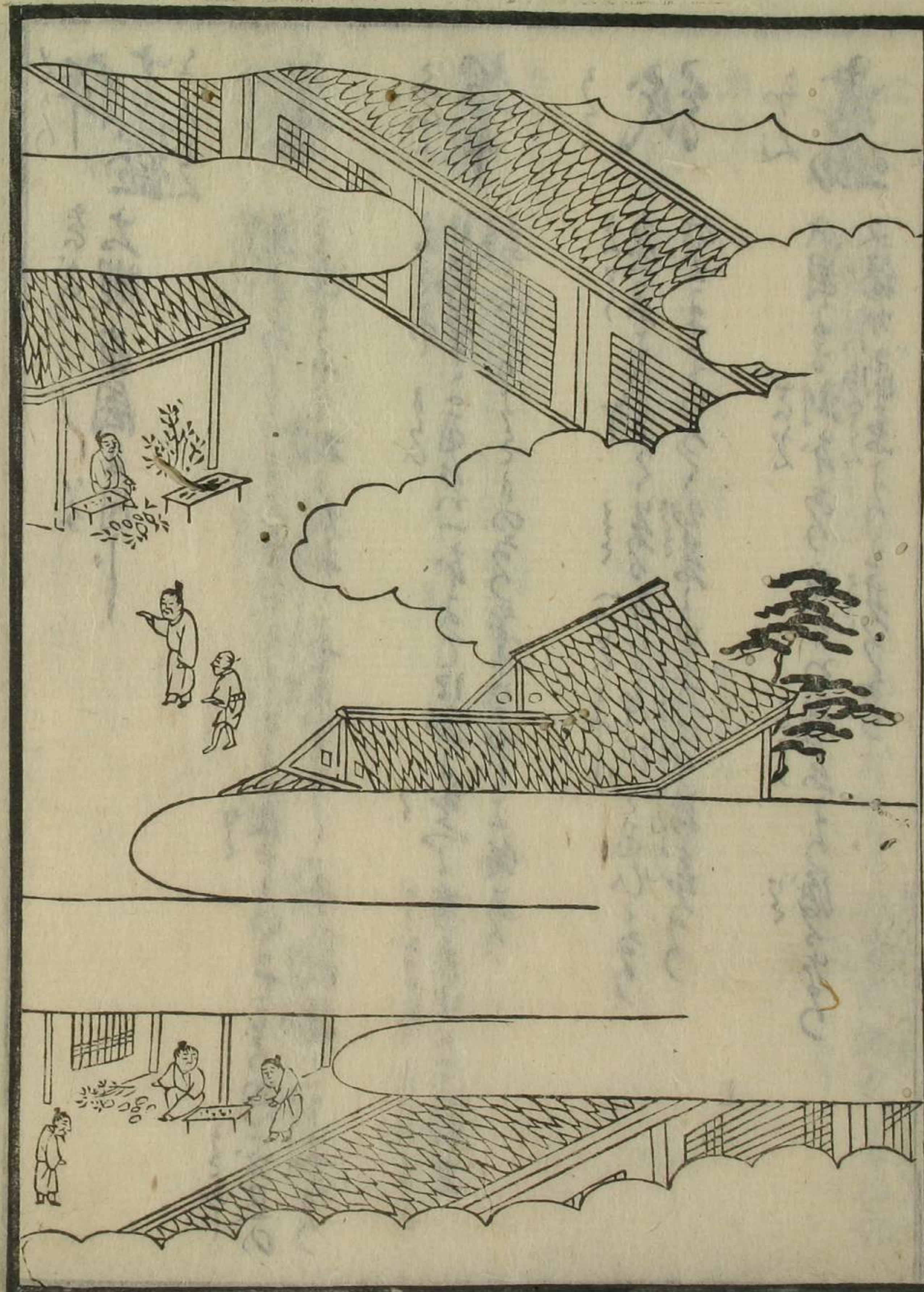
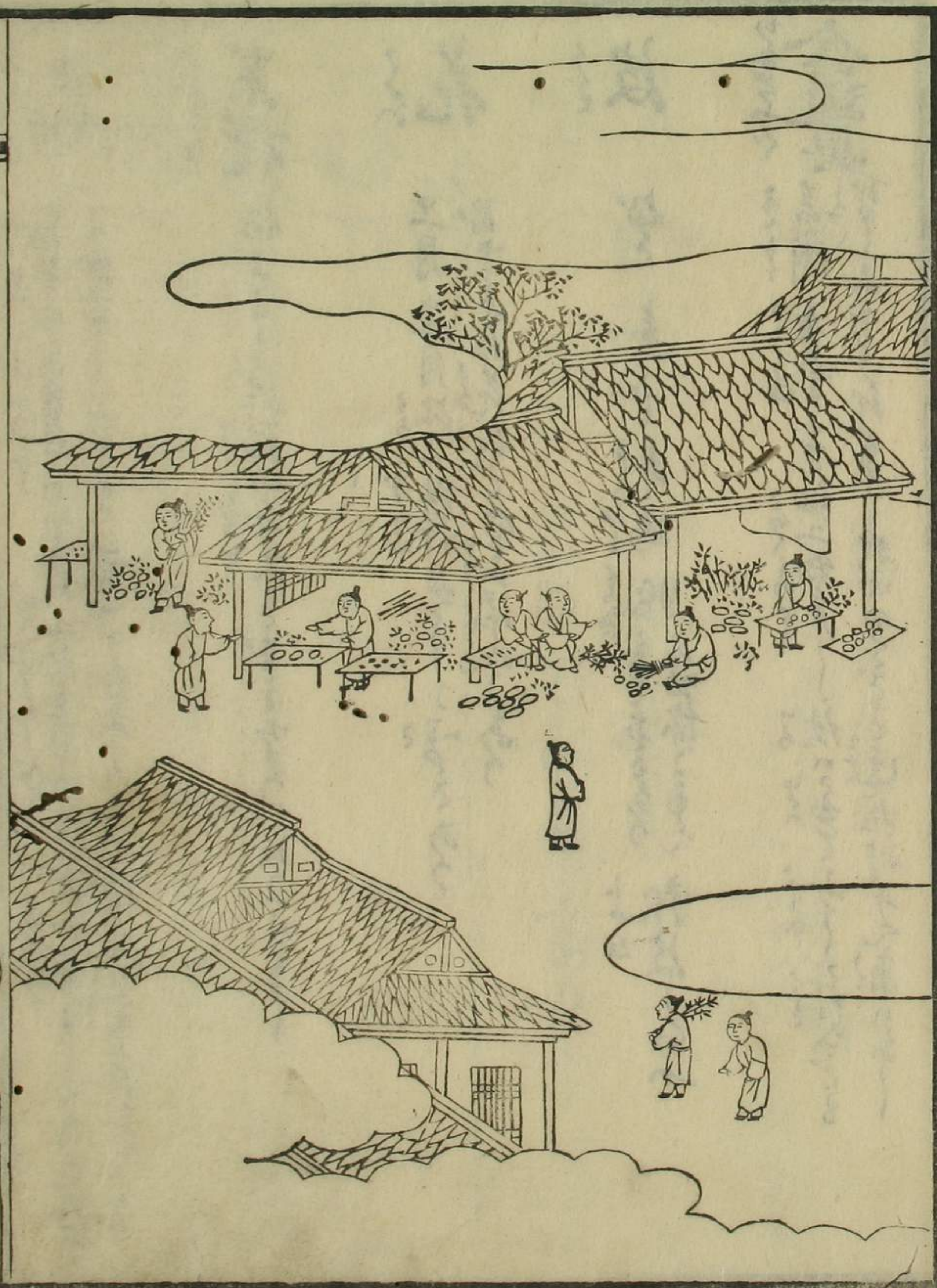
女商人

國風とて民風を以て女とて徳商人のかけあはすは
九つ女とて初るあり男の只がうくと酒とつと小詩とて
ひと味を造る小とてちとて商人の余ふてたふしのく
と花びあつて去地の風を之城下に七所八所の市場ありけ
所と新地とらふに方のう埃よそ申のき町斗も一日がの
小屋のてく建つてきか一店ありて言ふ毎朝おけり
登るててまぐで自業のふと我もくと飲よのせもふたう
背よ直ぐひおのく一店一我とてあぶなく賣るの振方る

車の日定しとてこしらへざりぬ一賣買とも男とていふ
く皆女斗立はとて商人とての格あありの是れおの二と
が所の新地一市店屋物よとて入用のふと買居り我れは
車とてありの種とてちりりなり

朱

凡そ朱代十式文のりつとて中ち一但し凡そまははふは外か
ふ合平入帳を朱とて又の種よとて二とていふ盛よとて賣る之文持
ひ合斗の入物よとていふりていふみとていふたをかう同とて二と
つきはが自業とて年分たに之店つとて買居り買居り味もか
もとて五とて大板の自業のてとて田とて一初らきは列入附よはわ
はうりもとてを田とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
若依いふ斗とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
あもりりとの中へはを強うとてむちり一億の朱とて人づとて



扇

扇の親骨中のやぎのふゆ香あり又一角よそのうく親骨
よ細くせしふもありりつう十文よりあり極上のふきをまてあり

葉袴

何よりうば袴のふたさざらちなり ねよこ

花

上月十二月は牡丹具なり一はあり
月やね花おどけははあり

皮

ねつど ね馬 ね皮とふ

金道具

金道具 金具 金物 金打

飛流

飛流 飛流 飛流 飛流

葉袴何れ用か ちよの通る也

二のぬいごきよきあり



飛流石具の新地居一賣物より出づ海よりついでゆき
 家にまゐる女商人種々の品と持出るといふことありし
 と書きたり

外國よりくる物大観

其の最上者 胡椒 胡椒 胡椒 胡椒
 薑黄 薑黄 薑黄 薑黄
 大根 樗 檟 栗 林檎
 此等より一道具といふてかぶりぬ品の海産物といふ
 事あり

貨物



安南國太祖頒天元年鑄之
 丁巳年迄三百六十九年也



後の大元皇帝の御時、穿格好より大元
 皇帝の御時より一統の帝に
 三都より一統の帝の御時より一統の帝
 といふことありし

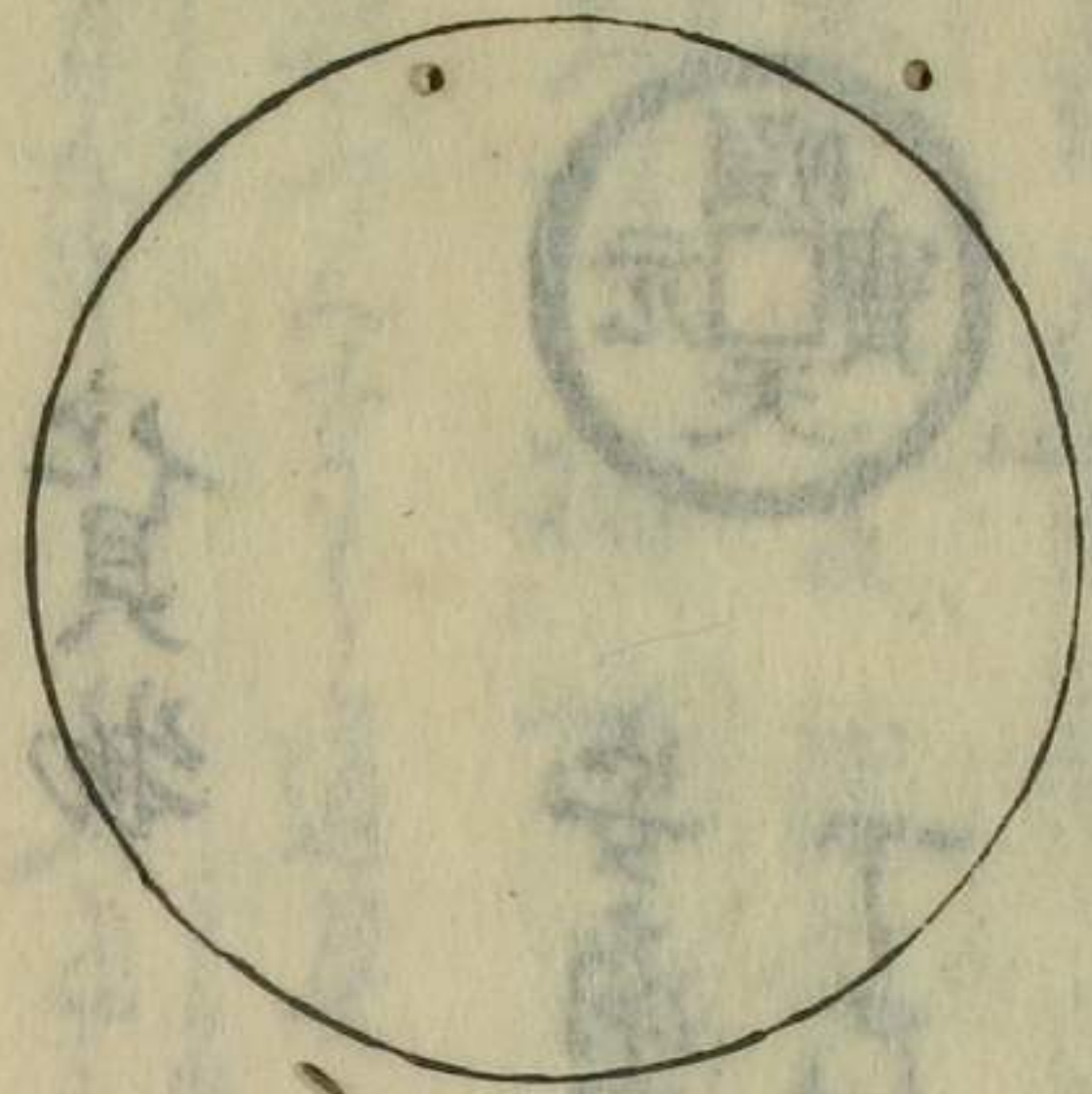
代後安南國通用錢あり

其の重よ古拾文づらふく一トはあざ

之重丁百八拾文と一ホと云

十ホ三拾目之百文つゝあざいホ

但し十六拾文の
右場よあざい



金貨のたゞさかへの

但し表裏とも模振ふ一ホと云
右の金銀と懐く一トはあざい
つぎの秤とあざい一トはあざい
うらんよ切秤よけいふのあざい
切す一切より通用かともあり



安南國の年号曰文字あり
代後載ふの錢あり古年元豊等乃
代後よ似ると景興と稱するあり

安南國の古祖領元元寶の錢始く傳ふの事考へ

その重よ古拾文づらふく一トはあざ

應永年中

の事とお見ふ

南瓢記卷之二終



南瓢記卷之二終
此書の...
長興面典
此書の...
長興面典

南瓢記

